

## 『にほんごこれだけ！』を用いた日本語支援

佐野香織（早稲田大学）

本ブース発表では、『にほんごこれだけ！1』（『にほんごこれだけ！2』（庵（監），2010，2011）をリソースに用いた日本語支援者の「支援」について述べるとともに，その中で参加者から挙がってきた「やさしい日本語」を問いなおすプロセス，日本語支援を問い直すプロセスを提示し，ここから改めてみなさんと一緒に考えて行きたい。

『にほんごこれだけ！1』，『にほんごこれだけ！2』（庵（監），2010，2011）は，地域に住むゼロ初級の外国人市民と日本語ボランティアが，おしゃべりを楽しみながら日本語を学ぶことができるテキストとして作られたものである（『にほんごこれだけ！』サポートサイト <http://cocopb.com/koredake/>参照）。この教材の特徴は，日本語ボランティアも活動を通じて自分たちの日本語のあり方，コミュニケーションのあり方を捉えなおすことを目指している点である。つまり，テキストは日本語を学ぶ人のためのもの，という前提を問い直し，「やさしい日本語」を地域市民が共に学び考えることを可能としている。

発表者は，自身も執筆に関わった『にほんごこれだけ！1』，『にほんごこれだけ！2』（庵（監），2010，2011）をリソースとして，日本語支援に興味がある人の「支援」をしてきた。これらの「日本語支援」の「支援」の現場の最初の声は，「日本語ボランティアをしたいがどのようにしたらよいかわからない。教えてほしい」というものだった。次に増えてきたのは，「やさしい日本語」を「目標言語」としてどのように教えたらいいか，「教え方」を「教えてほしい」という声，新たな目標言語としての「やさしい日本語」がどのようなものであるのか，日本人支援者にも「教えてほしい」という声が多数を占めるようになった。しかし，この「教えてほしい」という姿勢から支援者の意識も変わりつつある。

「福祉を目指す日本語教育」（佐藤，2017）では，福祉を「すべての人に最低限の幸福と社会的援助を提供する概念」と捉えている。そして，福祉の対象は，「限られた人（あるコミュニティのメンバーやある国の国民など）だけでなく人々すべてであるべき」としている。上記のように考えると，「やさしい日本語」は特別に非日本人とのコミュニケーションに使うもの，という固定的なものではなく，動的に考えられるものとなる。大切なことは，「やさしい日本語」を含め様々なことばがレパートリーとして存在していることを当たり前とする人々の関係作りなのではないか。

この関係作りを通し，なおかつ，関係作りの実践過程として，どのようなことばが創られるのだろうか。『にほんごこれだけ！』を使った日本語支援の「支援」を通して，人々の関係をやさしくすることばとしての「やさしい日本語」のあり方についても，みなさんと話をしていきたい。

